

ソ連の政変と波紋— 今後の日本の対応

数年のうちに「革命の世紀」は幕を閉じる

知日派の台頭に期待

今回のソ連の一連の激動は、予想外のことであったといえるが、やがてこうなると多くの人はどこかで感じていたのではないかと。

私自身も、ここ十数年、社会主義が成熟すればするほど、そこからの離脱が大きな歴史の動きになってくるし、時計の針が逆回転して、右回りこそが進歩だということになろうと、いつか来た。それが、われわれの目の前で衝撃的に音を立ててソ連が解体していった。まさに時代の大きなうねりを痛感させられた。

当面は、ソ連がどうなるかが大問題だが、さらに中国、北朝鮮、ベトナムなど社会主義を堅持している国々がどうなっていくかも大きな関心事である。

そういう観点から、私の見方を率直に述べていきたいと思う。

ロシア共和国のハズブラトフ最高会議議長代理、ソ連のヤブリンスキ―国民経済管理委員会副議長が相次いで来日し、北方領土について一八五五年の日露通商条約にさかのぼって考え直してもいいという発言を

している。このように、北方領土問題を含め、かなり流動的な状況が出てくるのが予想される。

日ソ関係でいえば、先日、来日したロシア共和国のクナーゼ外務次官は、知日派であり日本語もよくでき、私とは旧知の仲である。彼はソ連アカデミーの国際関係世界経済研究所(IMEMO)の日本・韓国問題の責任者(といっても課長クラス)にすぎなかったが、ゴルバチョフ大統領のブレイン、そしてロシア共和国の外務次官へと、あつという間に出世している。まさに歴史の変動期ならではのことである。

また、ハズブラトフ議長代行が日本でいろいろな談話をしているが、そのアイデアはほとんどクナーゼ氏から出ているという。

北方領土についても、クナーゼ氏は知日派だけに、いままでのソ連のかたくなな態度と違って、領土は返さねばならないとしている。ただ段階的返還論であり、まず二島を返還したのち、残りの二島については共同開発しようという考え方である。

もちろん、ロシア共和国の外交姿勢でもってソ連の対外政策がすべて

決まるわけではない。だが、現在の事態の進行具合をみると、ロシア共和国が圧倒的な指導権を持っていることは衆目の一致するところである。したがって、エリツィン氏なり、対日関係の知恵袋であるクナーゼ氏がどのように考えるかが非常に重要になってくる。従来の対ソ外交ではなかなか話が通じにくかったが、実際の政策決定において、知日派のクナーゼ氏が重要なチャネルになってきたことは注目される。

抑えられない民族主義

さて、ソ連邦は当分残ると思うが、従来の連邦とは違い、いわば緩やかな連合体制にならざるを得ないだろう。しかし、一〇年後、21世紀になると、ちょうど英連邦のカナダやオーストラリアが独立した主権を持っているような形でソ連、思い出しているような形でのソ連、思い出しているソ連ということになる。

今日、国際社会ではエスニシティ(民族主義)の問題に基づいて国家国境が作り直されようとしている。今回のソ連の解体も、単にベレストロイカをめぐる改革派対保守派の闘いというよりは、近代社会のつくつ

ZOOM UP



環境保全をめぐる諸問題

利益の調和を図ることが要請されている。さらに、社会貢献については、これを広く解釈すると、メセナ（芸術・文化の支援活動）なども含まれることになる。が、これらは、消費者や地域社会への利益還元ならびに、次に述べる環境問題対策などと比べれば、後順位のものと考えられ、社会貢献については、常に、その重点序列を誤らないよう配慮しなければならない。

環境問題については、一般環境（主として国内において発生）と地球環境の二つに区分して、対策を講ずる必要がある。

前者については、すでに長い歴史があるが、大気汚染、水質汚濁、騒音、振動、悪臭、土壌汚染、地盤沈下、生活・産業

廃棄物、化学物質（船舶や漁網の防汚剤として使用される有機スズ化合物をはじめとして、焼却灰や、クロロフェノール系除草剤から検出されるダイオキシンなど）、日照障害などを挙げることができ

る。また、後者については、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨などに区分できる。これら地球規模の環境破壊については、国際間の協調・連携が必要であるが、オゾン層の破壊に対しては、特定フロン

の排出を抑制することが急務であり、地球温暖化については、その原因である炭酸ガスなどの排出を抑制することが必要になる。そして、この点については、化石燃料の消費削減が基本的な手段となる。さらに酸性雨については、化石燃料の燃焼による硫黄酸化物や窒素酸化物の放出抑制（工場・発電所などの固定発生源）や、自動車の排出ガス浄化などが課題になる。

社内チェック体制の強化

さて、今回発生した一連の不祥事は、企業トップによる業績向上中心主義の経営指導、社員の倫理性欠如、事故防止体

制の欠陥などが絡み合ったものとみてよさそうである。

そこで経団連は、その対策として、社内チェック機関の設置を挙げているが、これまでも多くの企業では、公認会計士や監査役の監査をはじめ、内部検査機関として検査部等のチェック機関を有しているところが多かったようである。

にもかかわらず、支社や支店での犯罪が見抜けなかったのは、これらの内部検査機能が十分に作動しなかったものとみるべきだろう。

そうした意味では、チェック機関の設置ではなく、強化・再整備が必要ということになりそうだ。

そこで、この際、早急に、以下の体制を整える必要がある。

- ① 監査役の増員と監査回数増加、② 検査部の要員を増加し、二名を各支社・各支店に常駐させる（人事は検査部直轄とし、給料、経費も本部から支給）、③ 検査要員は、支社・支店の業務・会計検査を随時行なえることとし、事故、不審の点を発見したときは、直ちに検査部長に報告し、指示を仰ぐ、などである。

（毎月第3週号連載）



中嶋 嶺雄

東京外国語大学教授

「これからはエリツインの時代だ」といわれるが、ゴルバチョフがペレストロイカによって厚い殻を破ったからこそ、今日のエリツインの存在があるのだ。ソ連が英連邦のように形骸化するまでゴルバチョフが必要とされる。

た国の枠組みでは多様な民族の動きを治めきれないという本質的な問題があるように思う。

したがって、この民族的な動きはソ連だけにとどまらず、中国・アジア地域に及んでいくだろう。

現在、国連加盟国は一六六カ国、国連に入っていない国まで含めると、一八〇くらいの国がある。ところが民族は三千数百を数える。それらの民族がそれぞれ言語、伝統、文化、習慣を持っている。それを、近代社会は戦争を通して、いくつかの国に統合・分割した。それが国民国家というものである。日本のように一民族一国家というのは世界では非常に少ないわけである。

その三千数百の民族がそれぞれ要求を持ちはじめ、一八〇ほどの国に治めておくこと自体が問題になってきた。いわば近代社会の構造の無理が爆発してきたと考えるべきだろう。したがって、今日のソ連を考えると、ソ連という国の構成のあり方で翹^{さか}っていかねばならない。

いずれにせよ、いままでソ連という存在であったが、今回の事態を

みると、われわれはソ連をあまりにも恐れすぎていた、ソ連を過大評価していた、と思わざるを得ない。

あの八人組のクーデターが実にお粗末であったことから、経済はもとより政治システムもほとんど機能していないことを知った。KGBが神経細胞として存在し、軍の司令系統ががちりしていると思っていたが、そうではないことが暴露されてしまった。

これは今日のソ連に限らず、ブレジネフ時代でも、果たして内部を厳格にコントロールし得る体制にあったか疑問である。鑑をつけていたために、外に対しては威厳をもってみえたのではないか。これが今回の政変劇を通じてわかったことである。

ゴルバチョフの存在感

次に、エリツインとゴルバチョフの関係がどうなるかをみていきたい。

第一の視点として、エリツインがゴルバチョフを救出しなかったら、クーデターが成功し時代を逆戻りする方向へいったかもしれない。しかし、ゴルバチョフが撒いたペレストロイカでソ連社会は内部から変わり、

いわゆる市民が形成されていたから、保守派が一時的に抑えたとしても、抑えきれぬものではない。

そのいい例が東欧である。東欧にはすでに一種の市民社会が形成されていた。チェコの「ブラハの春」、ポーランドの「連帯運動」などにみられるように、一党独裁に対する下からの批判、文化水準の高まりなど、市民社会ができていたため、共産党の一党支配体制ではとても時代に合わなくなっていた。

多くのジャーナリストは「これからはエリツインの時代だ。ゴルバチョフの役割は終わった」という。しかし、ゴルバチョフの歴史的功績を忘れてはならない。

つまり、八〇年代半ばに登場したゴルバチョフがペレストロイカ、グラスノスチという改革を推し進めたからこそ、エリツインという人間も存在し得るようになったのである。改革はなかなかうまくいかないにせよ、大きな殻を破ったからこそ、エリツインが出てきたことを確認しなければならぬ。

また、ゴルバチョフが幽閉されていたクリミアから帰ってきてのち、

人民代表議員大会を開いて、当面の行政機構をどうつくるかという議論をしたが、彼はそこで大変なリーダーシップを発揮した。

やはり、すべてエリツインでいいというのではなく、当面はゴルバチョフの存在が必要であろう。したがって、日本側も、いきなりエリツインに電話をするのではなく、まずゴルバチョフ、次にエリツインというように順序を忘れてはならない。ソ連邦が解体し形骸化するまではゴルバチョフは必要だと私はみている。

目指す峰は一緒

一般にはゴルバチョフは優柔不断で、迷いに迷った挙句、今回のような措置に出たとみられているが、彼の著作なり、私が直かに聴いた演説では少し違うように思う。

端的にいうと、彼はマルクス・レーニン主義の棄教者であった。ソ連共産党の書記長としては、自らマルクス・レーニン主義を棄てるとは言い出せなかったが、心の中ではすっかり棄教者になっていた。

彼がもはや共産党はいらないと決断を下したのは、確信犯としての一

つの信念があったからであろう。東欧諸国の解体、ベルリンの壁の崩壊を座視していたのは、脱共産化へ進む方向を認めていたからなのだ。そこにゴルバチョフの歴史を動かしたという存在感がある。

一方、エリツインは、立場が立場だけに身軽に行動できたのである。確かに彼は人気のある政治家だが、どこことなく腕白少年をそのまま大人にしたようなところがある。だから、あのように事態が流動的になったからこそ、ヒーローになり得たのである。しかし、だんだんと落ち着いてくれば、やはりゴルバチョフのような冷静さが必要とされてくる。

昨年一月、エリツインは来日した。彼は共産党の政治局を追われて浪人中だったが、一〇日間、日本に滞在して、日本の繁栄ぶりを目のあたりにした。さらに日本を離れ米国に渡り、そこでも自国との違いに驚かされたらしい。

日本や米国のスーパーでは、一日、二日の食事のためにワゴンいっぱいのお買物をするのに比べ、自国では一日中、長い行列をつくって買えるものが、ひからびたじゃがいも、肉片

でしかない。その天国と地獄の違いに、彼は慟哭し泣いたそうである。

「ソ連のあり方は間違っている。市場のメカニズムを取り入れねばならない」と確信し、帰国後、直ちに共産党を脱党した。

そのエリツインの次の言葉は印象的であった。

「ゴルバチョフ氏と私をライバル関係でみる人がいるが、二人とも同じ峰を目指しているのだ。ゴルバチョフ氏はどこでどこで休んだり、あちこちを見回して、ベースを乱すので、早く峰を登ろうとする自分の頭が、彼の尻でつかえてしまう。だが私は別の峰を探しているのではない」

だからこそ、保守派のクーデターが起こったとき、両者は見事にスクラムを組んで闘ったのである。

社会の仕組みが変われば

さて、ソ連の一九一七年から今日に至るまでの長い歴史は一挙に覆された。崩れるときはこんなものなのであろう。だが今後、一五の共和国をどうやって再生していくか、経済の停滞をどうやって立て直していくかとなると非常にむずかしい。長い

間、親方日の丸の無気力な経済システムに親しんできた国民を活性化させるのは、並大抵のことではない。

米国の雑誌「タイム」は、「ソ連の破壊は一瞬にしてできたが、今後の再建は非常にむずかしい」といつている。まさに同感である。

私はしばしばソ連を訪れるが、ルーブルがそのたびに下落し、いまや紙クズ同然になってしまっている。空港からタクシーに乗るときも、ルーブルではなかなか乗せてくれない。ドルあるいはタバコのマイルポロを示すと乗せるという有り様。

ソ連では自国通貨が極端に弱いため、数千円持っていれば一週間は過ごせる。レーニングラードのフィルハーモニーが東京のサントリーホールあたりで演奏すると、入場料が一萬五〇〇〇〜二万円だが、モスクワではなんと、特等席で九三円である。

そういう音楽をはじめ、ソ連の芸術は非常に高い水準にある。それに比べ政治・経済のひどさはどうか。この大変なギャップはどこからくるのか。

民族的にロシア人が劣等だということではない。それは芸術をみれば

わかる。ロシア民族が劣っていたならば、とてもあれほど優れた芸術はできない。とすれば、根本は社会の仕組みである。社会の仕組みが変わっていけば、必ずしも悲観的な材料ばかりではなく、うまくいくかもしれない。

日本の国鉄だってあれほど赤字を抱えていたのに、民営化した途端に競争力がつき活力が出てきた。同様なことはソ連にもいえるのではない。ソ連は石油の埋蔵量が世界一であり、大変な潜在力を有するわけであるから、そういう状況を踏まえた上での先取りした政策が必要とされてくる。

見事なブッシュの対応

当面、北方領土問題がクローズアップされてくるが、ロシア共和国がこの問題についてかなり折れてきているので、慎重に、かつ積極的にソ連のニーズに応ずることによって北方領土問題の解決を図るべきだろう。その場合、エリツィンだけに急激に傾いていくのではなく、ゴルバチョフを立て、同時にエリツィンとの太いパイプをつないでいかねばなら

ない。

しかし、それだけでいいわけではない。エネルギー問題を含め、将来の生存のための戦略、日本の果たすべき国際的な役割というものも見逃してはならない。

その点、米国のブッシュ大統領はさすがである。彼は別荘に行ったりであったが、ソ連の細部まで読み込んだ対応をしている。クレーダーについて「驚いた、まさに雷に襲われたようだ」と発言しているが、ほぼシナリオは読んでいたと思う。

さらに、ブッシュ大統領が偉かったと思うのは、クレーダーが起きた直後に「八人組を正当な政権とは米国は絶対に認めない」とはっきりいってしたことである。その点、日本の海部首相は、ゴルバチョフ氏が帰ってきて一件落着してから、エリツィン氏に電話をかけたあたりしている。

ブッシュ大統領は、資源・エネルギーを有するソ連に対して、米ソ共同の大型プロジェクトを組むなど、将来を見据えて対応している。そうしたことに日本政府は考えが及ばない。ソ連がいわば手の内をさらけ出しているときに、もっとダイナミック

クにソ連社会の内部まで飛び込むような対応、しかもソ連の再建に貢献するような対応が必要であろう。

中国の変革も近い

今回の事態で最も大きな衝撃を受けたのは、やはり中国である。

中国政府は、この七月のころから、世界の社会主義解体の兆候をつかんで、「ソ連がどうなるかと、東欧が社会民主主義へ移行しようと、自分たちは断固としてマルクス・レーニン主義、毛沢東思想、そしてプロレタリアートを捨てない」「内部的な締め付けを断固として強化せよ」といつてきた。

八人組による政変が起こった翌日には、八人組を認知するかのような形の報道をしている。そしてクレーダー失敗後には、「断固として社会主義解体の波を防止せよ」という内部通達を出し、非常に厳しい措置をとっている。

最近では「蘇東坡を防止せよ」と、共産党を中心に盛んに宣伝している。「蘇」はソ連、「東」は東欧、「坡」は波の意味である。また、蘇東坡という宋の有名な詩人がいて、それと

の語呂合わせなのだろうが、「ソ連・東欧の波を防止せよ」が至上命令になっている。

しかしながら、私のみるところ中国の体制も数年のうちに崩れていく可能性がある。ただ、ソ連と大きく違ふところは、革命第一世代がまだ政権を牛耳っていることである。楊尚昆が国家主席、鄧小平も形の上での引退であって、天安門事件の直前に失脚した趙紫陽が「すべての重要事項の決定は鄧小平同志に委ねられている」と暴露している。

党中央の秘密会議が撤廃されたという話は聞かないので、やはり鄧小平が院政を敷いているといってもいい。彼は元気で、この夏も別荘地で泳いだという。しかし、この八月で八七歳だから、どうみても、数年のうちに大変動があるとみられる。

中国の共産体制が崩壊すれば、いまままで押さえ込んでいたチベットで民族自決問題が台頭してくる。民族、文化、宗教が違う異民族を中国内に押しとどめておくこと自体が無理なのだから、独立運動が起こっても当然だろう。トルコ系住民の多い新疆ウイグル自治区でも同様であり、現

在もウルムチをはじめ、あちこちで民族紛争が起こっている。

ただ、ソ連とは違い、徹底して報道が規制されているので、ウルムチやラサ(チベット)で暴動が起こっている、密室で徹底した抑圧が行なわれている可能性がある。

しかし、蘇東坡の防止をやっている、一方では「南風」が吹いてきている。「南風」とは香港、台湾の影響である。福建省などにいくと、もう台湾様々である。台湾の一人当りGNPは中国の三〇倍、もうすぐ四〇倍になる。台湾がいかに豊かで素晴らしいかみなわかつている。台湾の企業に進出を熱望し、台湾の金持ちに台湾旅荘というマンションを買ってもらおうとしている。

北京では「民衆の間に崇台思想(台湾崇拜思想)が蔓延している。崇台思想を克服せよ」といっている。しかし、仮に蘇東坡は防止できても、南風は防止できないだろう。南風がジワジワと中国社会を変えてしまっているからである。

革命の世紀の幕は開く

次に北朝鮮だが、中国が先に崩れ

北朝鮮のほうがもつかなという気がする。これは端的に言って、鄧小平と金日成の年齢の違いである。それに、中国では共産党は国民から完全に信用を失っており、軍(人民解放軍)も土着化というか、地方分権が進み利益集団化している。ところが北朝鮮は厳しい統制が崩れていない。

私が北朝鮮を訪れたとき、いってみれば新興宗教の教団の中に入った感じがした。二〇〇〇万人くらいのサイズで一糸乱れぬ統制が行なわれ、情報も閉ざされていると、自己陶醉、魔術にかかったように国民すべてが痺れているという状況である。北朝鮮はまさに宗教国家といえる。

また、「ソ連や中国がどうなるかと、北朝鮮は唯我独尊、わが道をいく」という金日成の主体思想(チュチェ)は、依然として崩れていない。もちろん、不満や抵抗はあるだろうが、それらはすべて粛清されており、まだまだ麻薬が効いている。

しかし、麻薬が切れて痛みが出てきたとき国民がどうなるか、そして金日成の息子・金正日への権力継承がうまくいくか問題である。

北朝鮮は、唯物論ではなく、唯心

論であり、一種の新興宗教の国である。その一方で儒教の家父長体制という面もある。つまり、金日成一族、金王朝なのである。そこで、台湾の蔣介石一族、蔣王朝が蔣経国、そして李登輝に継承されたように、北朝鮮でも金正日にバトンタッチし、うまくソフトランディングできないかと模索している。

しかし、台湾の場合、蔣経国は大変立派な人物であったし、李登輝も台湾人出身の平民であり、民主的な優れたステーツマンである。金正日が蔣経国ほど偉大な人物かどうか、そこがまだよくわからない。

その上、北朝鮮は国際的に孤立している。唯一、中国だけは北朝鮮を大事にしているが、中国自身が危機にあるから、いつまでも中国に頼るわけにはいかない。

ところが、北朝鮮の経済成長率は昨年マイナス三・七%。外貨準備もないし、対外債務も一〇〇億ドル近くしかない。やはり、日本や米国に頼っていかないと、われわれが北朝鮮を西側の情報空間の中に入れて、ダイナミックに北朝鮮の将来を先取りすることも必要になってくるだろう。

最近、政権交代が行なわれたベトナムもドイモイ(刷新)という改革をやっている。やはり台湾や香港、そしてASEANのマレーシア、タイあたりと結びついていかにざるを得なくなっている。

このように、社会主義は時計の針が逆転するようにして、この世から消えていくだろう。20世紀は革命の世紀といわれたが、大きな犠牲を払っただけで、その革命の命脈は二〇世紀のうちに絶えそうである。

価値観が多様になり、情報が開かれてくると、国民をがんじがらめに閉ざしていくことはできなくなる。しかも軍や秘密警察で全体を律することがいかに誤りであるか。それが証明されただけでも、人類にとって幸せである。

しかし、かつて地球の半分くらいが社会主義になろうとしたわけだから、この跡始末をどうつけるかは人類の課題であり、わが国がそういう役割を果たせるかが問題である。真の意味での外交能力、国家としての能力を問われることになろう。

(講演要旨)